

## 帰国留学生の対日イメージと態度に関する研究

徐 光 興<sup>1)</sup>

### 問題と目的

現在日本において最も留学生数が多いのは中国人留学生である。1996年3月日本文部省の報告によると、平成7年5月現在の留学生数は53,847人で、そのうち、中国留学生が約24,000人(全体の44.7%)でトップとなっている。ここで、中国人留学生の日本留学に関する調査研究が一層重要かつ意義深い研究課題となってくる。

一方、中国国家教育委員会(日本文部省に相当)の発表(1991年)によると、1978年以降に派遣した9万余りの留学生はすでに約5万人の留学生が帰国した。92年現在、約7,000人の日本留学経験者が帰国した。帰国留学生こそ中国の知識人の中であってエリートの人物となる。今日の中国で、学界をはじめ、政府、党政、外交、経済界、民間企業などの幅広い分野で日本のよき理解者として活躍していると同時に、国家建設の中で中堅的な役割を果たしている。

ところが、在日留学生の心理調査(徐・蔭山, 1994)では、ときに日本社会と日本人に対する厳しい意見と強い不満の声が聞かれる。これらの留学生の言葉を借りると、「欧米に留学した留学生は、学業を終えて帰国した後にその多くが親米派、親欧派となるが、日本へ来た留学生が日本を離れるときには、ほぼ全員が反日派の旗手となる決心を固めている」という。日本政府および関係者もこれについて、内部的にも、また公式の場でも、憂慮を示している。

しかしながら、在日留学生の中から将来の優秀な人物を現われることを期待するとともに、その実力、役割や影響は、本来帰国後の生活の中で真価を発揮するものでなければならない。したがって、留学先国に対する評価、態度、イメージなどの検討にあたっては、より長期的な視野が必要となり、そのためには日本に滞在中の留学生だけではなく、留学を終えて帰国した留学生を対象とする調査が不可欠となる。

本研究は、日本留学を終えて帰国した人たちを対象に

選び、それらの人々の対日イメージと態度について分析、検討を行い、それに基づいて中国人の日本留学がもつ意義、態度や影響の一端を解明することを目的としている。本研究の視点は、以下の問題に焦点をあてて検討したいのである。

1. 現在中国の多様な分野で活躍している帰国留学生たちには、日本に対するどのようなイメージをもっているのか、彼らは日本人のイメージをどのように捉えているのか。
2. こうした対日イメージや態度は、滞日経験やその他の要因によってどのように変化していくのか。
3. 帰国留学生は日本での生活を体験した後、はたして母国の若者や後輩たちに日本留学を勧めようとするだろうか、そして明日の日中関係にどのような影響を及ぼすのか。

こうしたテーマに対する調査データを得て、今後の日本の留学制度、国際教育を検討するための重要な情報として提供することと、将来に日本のアジア政策を処理する際において参考的な指針となりうる資料を提供したいのである。

### 研究方法

**調査対象の設定** 日本留学経験を持ち、帰国したしかも現在中国の一般の人々へ大きな影響力を有する「エリート層」(例えば、大学教授、研究者、医師、弁護士、企業管理者など)の者を中心としたのである。

**予備調査と質問紙の構成** 本調査では、岩男・萩原(1988)の留学生の対日イメージ調査を参考としたうえで、中国系留学生の対日イメージを測定するために独自の22対のSD(Semantic-Differential)項目を用いて、それによって予備質問紙を構成した。

この22対の形容詞で作った調査項目を検討するために、92名の在日中国人留学生と1995年の「日本留学の効果」のアンケート調査(徐・蔭山, 1995)を受けた帰国留学生の中で50名を選び、予備質問紙の調査を実施した。

次に、調査項目における全体被調査者の反応の因子分析(主成分分解により因子を抽出した後、バリマックス回

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

転)を行った結果、.350以上の因子負荷量をもつ項目に注目し、並びに一部の帰国留学生の面接調査に基づいて最終的に18対のSD項目を選び出した。

18対のSD項目を配列した質問紙により、今回の調査対象に対し正式な調査を行い、その他の対日態度や評価の項目調査を並行して回答するよう求めた。また、在日留学生の対日イメージとどのように異なるのか、予備調査を受けた90名の在日留学生に帰国留学生と同様に18対のSD項目調査を受けてもらい、両者の比較を試みることにした。

### 手続き

郵送法を用いて、調査票を配布、回収した。

調査時期：1995年11月から1996年2月迄

調査地域は中国の上海市、北京市を中心とした。

調査の予定サンプル数は200名とした。回収数は112人、回収率は56%で、うち有効回答は108通、有効回答率は96.4%であった。さらに、回答者の46.3%が今後も調査に継続的な協力の意思があることを表明していたことは、今回の調査の特徴ともいえる。

### 調査対象の属性と背景

**性別と年齢** 調査対象のうち、男性は72人(66.7%)、女性は36人(33.3%)であり、男性の平均年齢は45歳、女性の平均年齢は41歳であった。

また、男女別の年齢構成をTable 1に示す。

#### 来日留学の年代と在日期間

調査対象の来日年代、帰国年代などをまとめてFigure 1に示した。調査対象の中で多くの方は90年代から来日、90年代に帰国した者であり、その数が65人(60.2%)で、第二位が80年代から来日、80年代に帰国したもので26人(24.1%)、第三位が80年代から来日、90年に帰国した者で17人(15.7%)であった。そのうち、日本への滞在年数の最長期間は13年11ヶ月、最短期間は1ヶ月(短期研修)であり、全体の調査対象の平均日本滞在期間は3年1ヶ月であった。

**日本留学で取得の学歴と学位** 調査対象のうち、博士号をもつ者の数が16人(14.8%)、修士号をもつ者の数が13人(12.0%)、日本の大学学部卒業者および中国の大学学部卒業後に日本の大学学部・大学院の研究生経験を有した者が64人(60.2%)で圧倒的に多い。また、日本の短期大学卒業者が11人(10.2%)、専修学校卒業者

Table 1 調査対象の男女別の年齢構成

性別\年齢	30-34歳	35-39歳	40-44歳	45-49歳	50-54歳	55- 歳	合計
男性 (%)	12 (11.1)	7 (6.5)	18 (16.7)	10 (9.3)	13 (12.0)	12 (11.1)	72 (66.7)
女性 (%)	9 (8.3)	3 (2.8)	10 (9.3)	5 (4.6)	6 (5.6)	3 (2.8)	36 (33.3)
合計 (%)	21 (19.4)	10 (9.3)	28 (26.0)	15 (13.9)	19 (17.6)	15 (13.9)	108 (100.0)

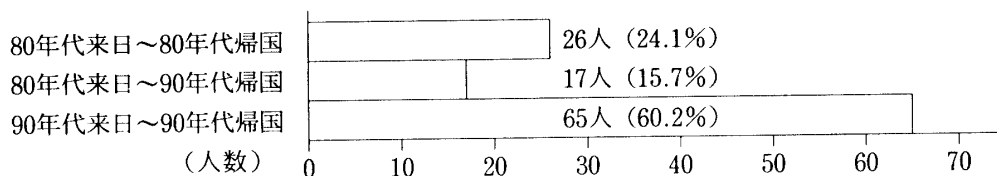


Figure 1 調査対象の来日年代と帰国年代

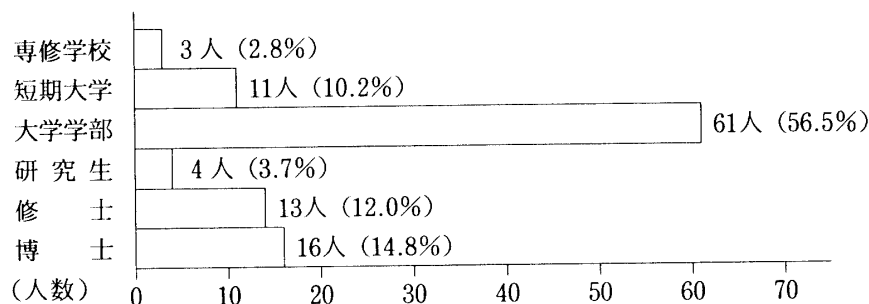


Figure 2 調査対象の取得学位・学歴レベル別

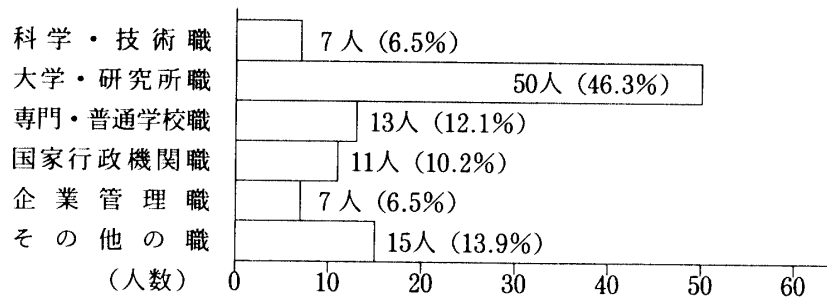


Figure 3 被調査者の現在の職業別

Table 2 調査対象の役職別

職場	役 職	人 数	%
大 学	学 院 長 ・ 学 部 長	3	2.8
	教 授	8	7.5
	助 教 授	11	10.4
	講 師	9	8.2
	助 手	1	0.9
研 究 所	所 長 ・ 副 所 長	4	3.7
	研 究 員 (教 授)	7	6.5
	副 研 究 員 (助 教 授)	6	5.6
	助 理 研 究 員 (助 手)	1	0.9
学 校	教 員	12	11.1
	日 本 語 教 師	1	0.9
技 術 職	エ ン ジ ニ ア ・ 農 芸 師	4	3.7
	出 版 社 編 集 長	1	0.9
	医 師	2	1.9
政 府 機 関	部 長	1	0.9
	処 長	1	0.9
	課 長	2	1.9
	科 員	1	0.9
	外 務 官 員 等	6	5.6
企 業	社 長	2	1.9
	副 社 長	1	0.9
	他 の 管 理 職	4	3.7
他	弁 護 士 ・ 開 業 医 等	15	13.9

- (注) 1. 調査時点での職種・役職を記入する。  
 2. 政府機関職は教育研究職以外の政府行政の公務員職である。  
 3. 病院医師は科学技術職に分類する。弁護士などはその他の職業に属する。

がわずか3人(2.8%)であった。(Figure 2)

現在の役職 職業に関しては、調査時点で86.1%の人が国家の正規の職についていたが、その他の13.9%の人が民間企業あるいは自由職業を選んだ。具体的には、①大学・研究所などの研究者50名(46.3%)、②一般学校の教員および日本語教師13人(12.1%)、③科学技術者など7人(6.5%)、④国家行政機関管理職11人(10.2%)、⑤

企業管理職7人(6.5%)、⑥その他の自由職業15人(13.9%)で、ほぼ被調査者の半数は大学・研究所の職に集中している(Figure 3)。そのうち、大学教授、助教授のような研究ポストについての対象は39人(全体の36.1%)で、被調査者の三分の一強を占める(Table 2)。これは、今回の調査のもう一つ特徴といえる。

## 結 果

### 1. 対日イメージの構造

まず、帰国留学生の質問紙におけるSD項目の反応値に対する因子分析を行い、その対日イメージの構造を検討している。主成分法の因子分析の結果、3因子が抽出された。第Ⅰ因子を「先進性(Modernity)」因子、第Ⅱ因子を「人間性(Humanity)」因子、第Ⅲ因子を「優秀性(Excellence)」因子と命名する。各因子の負荷量はTable 3に示すとおりである。

次は、帰国留学生と在日留学生との対日イメージのプロフィールを調べて比較することにしよう(Figure 4参照)。

全体調査対象は、日本人の「責任感がある」、「仕事が勤勉」、「競争心が強い」などの側面に対しポジティブな評価をして、「男女平等」、「偏見がない」、「能力主義」などの側面に対しネガティブな評価をすることが示されている。その対日イメージの因子構造からみると、日本人の「優秀性」は高く評価され、「先進性」は低く評価されていることになる。また、「人間性」に関する「つきあいやすい」、「考えが新しい、創造的」といった項目で好意的評価をしている。

なお、帰国留学生男女の対日イメージの全ての項目に有意差が見られなかった。その中で、女性より男性の方が日本人の「男女不平等」、「地位、身分主義」を強く感じている。男性より女性の方が日本人の「つきあいやすい」、「礼儀正しい」を高く評価している。

また、在日留学生との対日イメージを比較するときにはあまり大きな違いはみられなかったが、「男女平等」、「偏見がない」といった「先進性」にかかわる項目で、

Table 3 因子分析結果（主成分分解，バリマックス回転後の負荷量）N=108

項 目	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	共通性
博愛，寛容的－排他的，心が狭い	.794	.269	.123	.719
国際主義－島国主義	.716	.291	.115	.610
謙虚，民主的－傲慢的，不民主的	.670	.346	-.052	.571
親切，思いやり－不親切，冷酷	.614	.219	.196	.463
表現が明瞭－表現があいまい	.609	.228	.043	.424
男女平等－男女不平等	.607	.081	-.366	.509
偏見がない－偏見がある	.507	.176	.263	.357
礼儀正しい－礼儀が過度	.370	.134	.048	.130
よく自我反省的－不反省的	.184	.698	.005	.521
実力・能力主義－地位・身分主義	.283	.606	.072	.453
考えが新しい－考えが古い	.178	.599	.071	.423
公平主義－利己主義	.393	.563	.071	.477
つきあいやすい－つきあいにくい	.230	.497	.207	.309
責任感がある－責任感がない	.015	.027	.676	.458
信頼できる－信頼できない	.541	-.002	.641	.703
仕事が勤勉－仕事なまけもの	-.163	.266	.636	.502
競争心が強い－競争心が弱い	.022	.375	.601	.502
誠実・正直－不誠実・不正直	.511	-.368	.595	.752
二 乗 和	4.029	2.504	2.350	8.883

在日留学生より帰国留学生の方がややネガティブな評価をしている。しかし、この調査結果をみる限り、帰国留学生の対日イメージが悪化するような形跡がなく、むしろ在日留学生に比べると全体に上昇的に評価する傾向を示している。これは、帰国留学生は日本を離れて時間がたつと対日イメージが好転するのだろうか、または日本を離れると日本へ客観的な評価が生じてくるのだろうか、今後、さらに深く検討が必要である。

## 2. その他の対日イメージと評価

日本に来て留学生生活を通じて、日本社会と日本人と深くつき合うようになった留学生は、日本を離れると日本人をどう評価しているだろうか。質問調査紙で設定されたSD項目に限らずに、それぞれの留学生個人に対し、各自で対日イメージを形容詞の形でしぼって回答を求めた。Table 4は、帰国留学生の答えの多い順によって、日本人の優れた点（長所）と短所の二つの対極的な意味をもつ評価をまとめて示したものである。

Table 4をみると、帰国留学生は、在日留学生の調査結果とほぼ同様に（徐・蔭山，1994）、日本人の勤勉、まじめ、文明、礼儀に関しては一貫して高く評価をする傾向が現われているのである。逆に、日本人に欧米には

迎合、崇拜の態度をとるが、アジアの人々には冷淡の態度だ、という批判の声をしばしば耳にする。今回の調査でも、同じくこういう評価を下す傾向も出てきた。国際化を迎える日本社会では、一部の日本人の偏見と閉鎖性があること、帰国留学生の対日イメージの中に残っていることが裏付けられているのである。

## 3. 対日態度

次いで、質問紙で以下のような項目を設定した回答を求める。

- ① 今後、日中両国の経済、文化、教育などの領域において国際的協力、親善交流のことに對し、あなたはどのような態度を持っていたのですか。
- ② 本国の友人や後輩たちから外国へ留学したいと相談されたとしたなら、あなたはその友人や後輩達に日本への留学を勧めますか。
- ③ あなたは母国の政府や社会の指導的立場に立つ人間としたなら、どのような対日政策の態度をとることにしますか。

その回答をまとめてFigure 5に示しておこう。

Figure 5を見れば分かるように、全体として帰国留学生は日本に対する親善、友好、プラス的な態度を表明

原 著

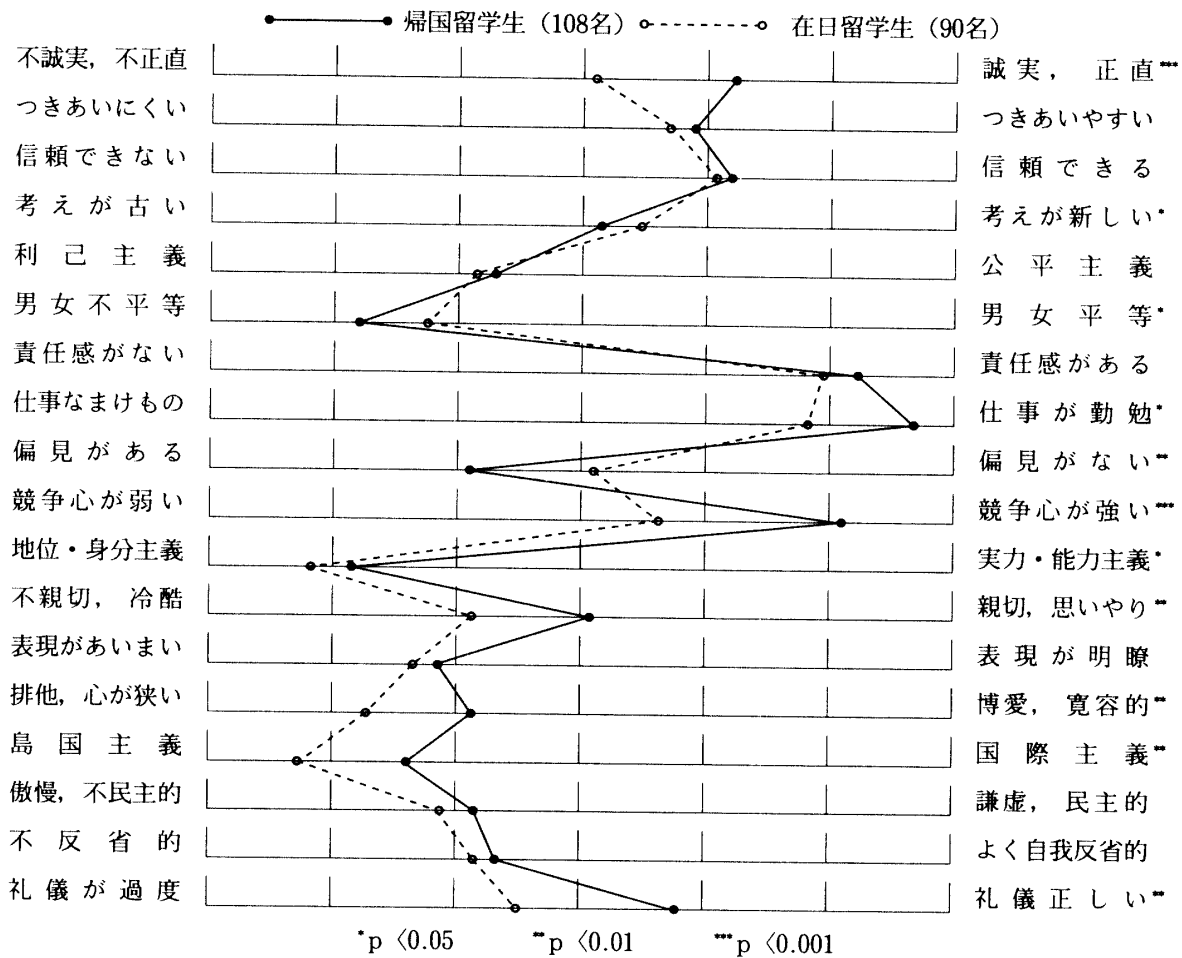


Figure 4 対日イメージ (帰国留学生と在日留学生)

Table 4 帰国留学生の他の対日イメージと評価

順位	優れた点 (長所)	回答者の%	欠点 (短所)	回答者の%
1.	文明, 礼儀正しい	62.1	アジア蔑視, 欧米崇拜	65.7
2.	勤勉, 仕事まじめ	60.2	排他的, 島国主義	39.8
3.	社会は安定, 秩序をよく守る	45.4	オモテとウラが違う, 偽りが多い	35.3
4.	環境がきれい, 清潔, 衛生	35.2	人情が薄い	29.6
5.	情熱, 辛抱強い民族	28.7	保守的, 紋切り型	25.9
6.	生活, 交通が便利	25.0	創造性, 生気が欠乏	19.4
7.	団体精神, 自尊心が高い	18.4	仕事中毒	11.2
8.	教育・文化の重視, 発展	12.1	弱肉強食のいじめ社会	9.3

した傾向が示されている。まず、「今後、日中両国の国際親善・交流に関する」態度に対し、94人(87.1%)が大きく発展、強化していく必要があると答えた。次は、「対日政策をとるときに関する」態度に対し、友好、親善な態度をとることを主張する者は、88人(81.5%)で圧倒的に多い。ただし、「友人や後輩達に日本への留学

を勧めるのか」を尋ねる問いにおいて、「勧めない」、 「意見保留・分からない」がそれぞれ8人(7.4%)、31人(28.7%)で比率がやや大きくなっている(全体の39人36.1%)。そして、「対日政策をとるときに関する」態度において、警戒を主張する者は17人(15.7%)である傾向を合わせてみると、一部の帰国留学生は日本留学が

帰国留学生の対日イメージと態度に関する研究

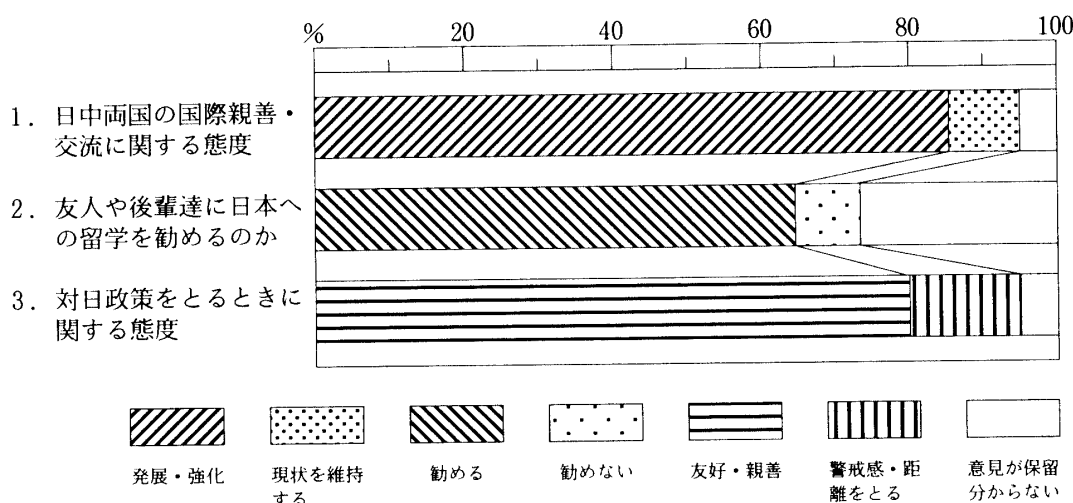


Figure 5 帰国留学生の対日態度

良い印象ではなく、日本に対する婉曲的な批判の態度を表明しているのではないかと十分な注意、認識を払う必要があると思われる。

4. 自由な意見

今回の調査では、被調査者に以上の三つの質問項目 (Figure 5) を、その他の意見と態度があれば、記述するように求めた。以下は、その代表的な意見をまとめてみよう。

項目1についての意見と認識：

- ① 女性, 37歳, 大学研究職。  
「より多くの日本人が留学生の受け入れを国際理解、国際親善に資することを理解する必要がある。」
- ② 男性, 45歳, 大学管理職。  
「日中友好によるアジアの安定を維持すると思う。」
- ③ 男性, 36歳, 自由職。  
「現在の日本は近い将来の中国の青写真。日本の戦後経済戦略が中国の将来コースの導き手となる。」
- ④ 女性, 38歳, 医師。  
「日本での生活が長くなり、日本人とのより深い交流を求めるようになる外国人に対する日本社会の閉鎖性、「見えない壁」が存在することは気がつまる。」
- ⑤ 男性, 48歳, 政府公務員  
「日本では武士道、茶道、花道、華道、柔道、剣道、書道、弓道、香道、空手道などの文化特徴があるの他、人間関係の「和」道も存在している。われわれは日本文化をもっと深く認識する必要がある。」

項目2についての意見と認識：

- ① 男性, 45歳, 大学助教授。  
「日本の自然科学あるいは技術の分野では、進歩が非

常に著しいわけで、人文科学や社会科学の分野では、世界の先進国に比べてみてまだ国際競争力は十分とはいえないのではないかと。」

- ② 男性, 42歳, 大学管理職。  
「日本の大学での多くの若者は勉強をなまけ、アルバイトが一生懸命。指導教授は大変忙しい、研究指導にも顔がめったに見られない。」
- ③ 女性, 38歳, 大学講師。  
「留学生に対する学位の授与、とくに文科系の博士号の授与が極めて少ないことは国際通念からみて異常であり、学位の授与において一日も早く先進国の仲間入りをしてほしいものだ。」
- ④ 男性, 37歳, 技術者。  
「日本の大学の博士学位の審査基準やプロセスをもっと明確かつ公明に示してほしい」
- ⑤ 男性, 55歳, 大学教授。  
「日本の人文・社会科学は欧米の研究成果への依存度が極めて高く、こうした状況で副次的に、留学生に日本語に加えて英語力を要求し、英語圏以外の留学生に大きな負担をかけることになる。」

項目3についての意見と認識：

- ① 男性, 36歳, 会社管理職。  
「日本はいまだにアジアを見下す姿勢や差別を続けるのか、あるいは旧態依然たる欧米への追随姿勢で21世紀に臨むのか、それとも自らの理念を確立して、アジアの歴史に新しい一ページを切り開くかの選択を迫られている。われわれは深く見守ります。」
- ② 51歳, 男性, 大学教授。  
「日本の一部政治家と少数の勢力は中日関係を損なうために、常に中国およびアジア諸国に対する侵略の歴史

を美化し、過去の軍国主義の罪悪を擁護し正当化するためにあらゆる手段と言葉を用いていることを知っていなければならない。」

③ 女性、33歳、専門学校教師。

「日本の若い世代が現代生活に飽き、「日本人の勤勉と熱情」を失ってきている。学校のいじめと登校拒否の現象も増大しており、伝統的な年長者への敬意や幼い者を保護するという傾向も消えかかっている。日本の学校教育を抜本的に改革する必要がある。」

④ 女性、36歳、大学講師。

「日本の若者もアジアの若者、学生と接触することが重要であり、日本の若者はもっとアジアの発展途上国に目を向ける必要があると思われる。」

## 考 察

本研究は、1995年11月から1996年2月にかけて実施した帰国留学生を対象とする対日イメージや態度などを説明することを目的としている調査である。また、在日留学生の対日イメージとの比較を念頭に置いて、留学生の滞日時と帰国後の調査結果の比較が可能になるはずである。

イメージという用語は学者によって使い方が異なる。心理学の場合、イメージは客観的対象に対する感情で全体的な印象を指す(宮城、1990)、あるいは具体的な事物が眼前になくともその印象・心象を持つことができる、概念のように一般性や系統性を持つ認識である。しかし、本研究の背景として、この概念をもっともはっきりさせて置くことが必要であろう。

本研究の「イメージ」とは、国家、民族、文化のあらかじめ規定されたステレオタイプで、文化、価値観、経験および留学体験の選択的解釈から生まれるものをいう。そして、相手側が一般的に良いか悪いか、強いか弱いか、親和的か敵意的かを定めるものである。ただし、イメージが相手の判断の唯一の決定要因だと前提しているわけではない。また、イメージは必然的に誤認や印象違いをもたらしたり、現実の「歪曲」として常に「良い悪い」と決め込んでいるわけでもない。さらに、イメージはきわめて固定的で融通性がきかず、それと矛盾する現実や経験に直面しても長期にわたって変化しないことも意味しない。イメージは、文化と強く結びついたもので、その変化と流動性はすべて文化の価値・影響によって左右されていると考えられる。

帰国留学生は留学の全過程を終えており、在日留学生より留学先国に対するイメージを全体として評価できる立場にある。彼らのイメージの変容の間には、一つのサイクルがあり、すなわち入国直後、留学初期、中期、後

期、それぞれの特徴ある経験様式があることが知られている。帰国した後に、より客観的な立場に立って自他を評価する「統合」の時期が来る。そのイメージには、留学生の文化価値観、留学経験の特徴、深さ、時期の長さに関連していることは否定できない。帰国留学生の場合には、そのイメージがどれほど過激であり、片寄ったものであっても、それが一時的な興奮によるものでなく、留学生活や経験として残っているものによって、何度も考えまとめられた結論に近いものと考えてよい。

このような帰国留学生による対日イメージや態度は、日本の事物、制度を日本人の目から見のではなく、アジア人または留学生の目から見ることになるのである。日本人の立場に立って、しばしば、ほとんど無意識のうちに、留学生たちが日本の事物、制度を偏見なく、日本人の目で見たいと思うことがあるものだが、より広い視野、客観的立場、交差する多側面から見るという機会を失う可能性があるだろう。そのため、本研究は日本の事物、制度を留学生の目でみる機会を与えてくれることになった。

全体的として、帰国留学生は日本人の「優秀性」、「人間性」といった因子を高く評価し、「先進性」の因子が低く評価していることになろう。「男女平等」、「地位・身分主義」、「偏見がある」といった「先進性」にかかわる項目で、在日留学生でも、帰国留学生でも、ネガティブな評価が共通しているが、在日留学生より帰国留学生の方が日本に対する全体的なイメージが良好なものになっていることが確かめられた。しかしながら、今回の調査を見る限り、多くの帰国留学生が「日本社会の閉鎖性」、「欧米を崇拝する、アジアを見下す」、「偏見や差別」などそうした対人関係に直結する要因を大きな問題として強く感じている。とりわけ、中国、アジアから来た留学生たちは、欧米の人々と自分たちに対する日本人の態度の違いに心奥の民族自尊心を傷つけられ、それが「留日」から「反日」という逆の方向にさせる大きな原因となっていると思われるため、十分な注意を払う必要があると思う。

かつて、欧米に学んだアジア人は親欧米派になり、日本に学んだアジア人は反日派になるという歴史があった。中国や韓朝鮮の指導者たちにその前例をみることができ。この悪しき前例をくり返さないために、日本はどれだけ努力をしているのであろうか。はたしてアジア人蔑視の体質が昔日の泡沫のように消え失せたのであろうか。日本人は留学生の受入れに際して恩恵を施すといった態度でのぞみ、その見返りとして留学生からの好意や感謝の気持ちを期待しがちになる。しかし、そうした形で計算勘定をするのはもっとも慎むべきことである。

「心の壁」、「差別の壁」などが克服されないまま、こうして差別を受けた人間の屈辱感は容易に氷解せず、前述の反日派にならず親日派の効果を生み出すことが難しいのではないか。

発展途上国からの留学生たちは、おしなべて学資の調達、住居の確保、日本語と専門的学問の習得への血みどろの闘い、その他多くの艱難に立ち向かい勉学を続けている。留学を終えて帰国した後、日本へのイメージや評価は好転、上昇することが多い。しかし、自分たちに対する日本人の偏見、差別や閉鎖性は、帰国後も弱まることなく、留学生の心に残っているものらしい。全体として、対日イメージが帰国後に好転しても、偏見、差別や閉鎖性といった否定的イメージにはそう簡単に変化の兆しが現われていない。

最後、留学生の対日評価や意見から多くの有益なことを学べるはずである。経済力ができたら漫然と開発途上国の学生を迎え入れるというのではなく、アジアからの留学生を迎え入れ、しかも、その声に耳をかたむけ、ともに学び、教え、教えられることは、日本の留学制度のみならず、日本の大学の国際化を促し、日本社会の閉鎖性を打ち破り、異なる文化や考えをもつ多様な人々の存在が日本の社会全体を豊かなものにするうえでの一つ重要な鍵となるように思われる。

留学生受入れの意義は、親日家を育てることにあるのではなく、日本の文化を学び、日本社会との触れ合いの機会を通じて、日本の様々な事情をよく理解する「日本通」、すなわち「知日家」を育てることこそ真価がある。さらに、「心の壁」「差別の壁」という二つの壁が日本人の自主的な努力で克服されるとき、そこには人間同士の新しい友情が芽生え、たとえ資金的、物質的な不足があらうとしても、留学生たちは心から日本人と解け合い、信頼し、「アジアの一員」としての連帯感を持って二十一世紀を共生しうることになる。

謝辞：本研究は、1995年度、1996年度「富士ゼロックス小林節太郎記念基金」の研究助成金を受けて作成したものであります。ここにおいて、富士ゼロックス小林節太郎記念基金の創設者・富士ゼロックス株式会社小林陽太郎会長をはじめ、基金会事務局の萩谷邦夫、橋本和

子および関係者の方々に、心より感謝の意を申し上げます。また、本論文を作成するにあたり、私の指導教官である名古屋大学教育学部の蔭山英順教授のご指導をいただきました。ここに記して厚く御礼を表します。

## 文 献

- アレン・S. ホワイトティグ 岡部達味(訳) 1993 中国人の日本観 岩波書店  
 (Allen S. Whiting 1989 *China Eyes Japan*. University of California Press)
- Coelho, G. V. 1958 *Changing images of America: A study of Indian students' perceptions*. Grencoe, III: Free Press.
- 石附 実 1989 日本の対外教育——国際化と留学生教育—— 東信堂
- 岩男寿美子・萩原 滋 1988 日本で学ぶ留学生——社会心理学的分析 勁草書房
- Kelman, H. C. 1965 *International behavior: A social Psychological analysis*. New York: Holt Rainhart & Winston.
- 宮城音弥(編) 心理小辞典 岩波書店
- 永井道雄・原 芳男・田中 宏 1975 アジア留学生と日本 日本放送出版協会
- Taft, R. 1977 *Coping with unfamiliar cultures*. In N. Warren (Ed.) *Psychology*, 1 London: Academic Prees. 121-153.
- 徐 光興・蔭山英順 1994 在日中国人留学生の適応に関する実態と問題 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——第41号 39-47.
- 徐 光興・蔭山英順 1995 中国人留学生の日本留学の効果と情報に関する研究 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——第42号 89-106.
- 徐 龍達 1995 国際交流の先駆者・留学生 巨大情報システムを考える会(編) 国際化と「大学立国」社会評論会 Pp. 53-57.
- (1996年9月13日 受稿)



## ABSTRACT

A Study on the Returned Country Chinese Students'  
Images and Attitudes Toward Japan and the Japanese

Guangxing XU

The purpose of this study was to investigate how images and attitudes of Chinese students that have toward Japan and Japanese. The paper is based on data collected by 108 returned country Chinese students accepted investigate questionnaire, and the factors studies were modernity, humanity and excellence with Japanese by 18 adjective categories. The results showed that several findings are as follows : returned country students have a high estimation of the excellence and humanity with Japanese. On the modernity is a low estimate. The question is extremelly difficult for foreigners to be accepted by the Japanese society. There remains a second question : Japanese vary in their attitudes toward Westerners and Asian foreigners. It offers the key to an understanding of their images or attitudes of Japan and Japanese have changed since they returned home.

Key words : Japanese, returned country Chinese students, images, attitudes, estimation.